
ドリームライフ

火呪鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドリームライフ

【Nコード】

N5593W

【作者名】

火呪鬼

【あらすじ】

神奈川県屈指の美少女が集結する魅惑の女子校『私立花乃女子高等学校』通称『花女』に男子生徒が転校してきた。男子の名は、「鶴浜 南」。鶴浜は女と偽り、110mハードルで日本一になったがケガで欠場した女子生徒に、もう一度トラックに戻ってきてもらうために、花女の生徒として見守ることにした。鶴浜は、女子校ならではのトラブルなどに巻き込まれるが、バレずにいられるか！そして、女子生徒はトラックに戻ってくるのか！！ハーレム鶴浜に乞うご期待。（ワラ）

ださい。

*多少、いやらしい表現などありますが、ご了承ください

あらすじ

神奈川県屈指の美少女が集結する魅惑の女子校『私立花乃女子高等学校』通称『花女』に男子生徒が転校してきた。男子の名は、「鶴浜 南」。鶴浜は女と偽り、110mハードルで日本一になったがケガで欠場した女子生徒に、もう一度トラックに戻ってきてもらうために、花女の生徒として見守ることにした。鶴浜は、女子校ならではのトラブルなどに巻き込まれるが、バレずにいられるか!!そして、女子生徒はトラックに戻ってくるのか!! ハーレム鶴浜に乞うご期待。(ワラ)

*多少、いやらしい表現などありますが、ご了承ください。

#1 私立花乃女子高等学校

鶴浜「ここが、神の領域・・・私立花乃女子高等学校。通称、はなじょ花女」

つるはま鶴浜 みなみ南 高校2年の男子である。

ケガで欠場した110mハードルの女子生徒にもう一度走ってもらうために、花女に女子として転校してきた。

鶴浜は、身長159cm 体重55kgと少し大きめの女子として普通に通用する体形である。

これから、鶴浜のハーレム。夢の生活が始まる。・・・ハズだった・・・。

高橋「尚子、宿題終わってる？」

前田「まだ、おわってない」

田中「ねー、今日さフランスから転校生が来るんでしょ？」

清水「もしかして、白人金髪？」

山田「目が青い、とか？」

転校生が来ることにより、ハイテンションになった2年B組の生徒

たち。

そのとき！！

「ガラガラガラ・・・。」

壊れかけのスライド式の出入り口のドアが開いた。

先生「はーい、席に着きなさい」

田中「先生、フレンチな転校生は？」

先生「今から紹介します。」

先生「・・・どうぞ」

恥ずかしがりながら鶴浜が教室に入ってきた。

清水「えっ、日本人？」

先生が黒板に鶴浜の紹介を書いた。

先生「彼女の紹介をします。名前は、鶴浜 南さん。私立府蘭須学
院いんから来てくれました。では、鶴浜さん、一言お願いします」

鶴浜「南です。よろしくお願いします」

先生「じゃあ、今井さんの後ろの席があなたの席です」

クラスは38人すべて女子。しかも、花女といえば神奈川一の美女がそろいにそろった魅惑の女子校である。そんな女の子たちが、右にも左にも溢れるほどたくさんいる。

鶴浜は、あまりの興奮でそわそわしている。そんな鶴浜に、前田が声をかけた。

前田「南、そんなに緊張しなくても大丈夫だよ」

鶴浜「うつ、うん・・・」

興奮を抑えようと必死の鶴浜に、花女のオシャレ番長。田中たなか 玲奈れいなが鶴浜の身なりについて聞いてきた。

田中「なんで、もっとスカート上げないの？」

鶴浜は男なのに、パンツは女性のをはいている。したがって、前から見るとかなりモッコリしていた。

鶴浜「あー、府蘭須は、これぐらいが校則だったから・・・」

田中「花女は、スカート丈なんか校則ないんだから、太ももまで

上げても何も言われないよ。しかも、長いと男子から注目されないでしょう?」

いつも田中の親友で、第55回花女人気総選挙で1位に選ばれた、
前田 尚子まえだ しょうこも話に入ってきた。

前田「多少のパンチラで男子の心をゲット!しないかね」

鶴浜「パンツって見られても恥ずかしくないの?」

田中「逆に恥ずかしいの?」

田中「まあ、生理のときは、ナプキンつけるから多少は恥ずかしいけど・・・」

鶴浜は周りを見渡した。

鶴浜「確かに、みんな太も見えてる」

太ももを見るだけで心拍数が上がった。

前田「でしょ?」

そのとき、鶴浜は思った。

鶴浜（・・・これって、〇〇したら終わり・・・？）

「キーン・コーン・カーン・コーン・・・」

授業が終わった。

田中「尚子、新しい服を買いに行こう？南もね」

前・鶴「うつ、うん」

3人は教室を出た。
そのときだった・・・。

西野「南・・・？」

鶴浜は顔を上げると、幼なじみの西野^{にしのみ} 麻友^{まゆ}がいた。

西野「チョツと」

そういうと、西野は鶴浜の腕を掴み、2人とは逆の方に歩き出した。

鶴浜「ゴメン、先行ってて」

田中と前田は、顔を見合わせキョトンとしていた。

花女の中には噴水がありその前にベンチに西野と鶴浜がいた。
西野だけがそのベンチに座り、目の前でうつむいて立っている鶴浜に聞いた。

西野「どうして、男の南が化粧までして花女の制服を着てるわけ？」

口を尖らせて聞いた。

鶴浜「それは・・・その・・・色々あります・・・」

西野「ハッキリ、答えて!!」

鶴浜「麻友は相変わらず、可愛いねえー」

話をそらそうとするが、西野には効かなかった。

西野「ふざけないで!!」

西野には、校舎から出てきた田中と前田が見えた。

西野「理由は、また今度聞く」

西野は立ち上がり50mくらい離れている田中と前田に大きく手を振った。

西野「田中さん。南ここにいるよー」

田中と前田が気づいたのを見て、

西野「気づかないことね」

つというと、帰って行った・・・。

田中とが鶴浜を大声で呼んだ。

田中「南、早く行くよー」

鶴浜「うっ、うん!」

鶴浜は何事もなかったかのように笑顔で2人のもとに走った。

つづく

#2 二人っきりの試着室（前書き）

私立花乃女子高等学校に鶴浜南が転校してきた。

そこで、唯一鶴浜が男だと知っている西野 麻友に出会う。

鶴浜は同じクラスの田中と前田と一緒に服を買いに行くことになった・・・

多少いやらしい表現がありますが、ご了承ください

#2 二人っきりの試着室

3人は、近くの「SENSE」という店に来た。

田中「ここは、かわいい服もたくさん売ってあるし、私のおすすめの店」

鶴浜「へー、こんなところで服買ってるんだ」

前田「玲奈は、花女のオシャレ番長だからねえ」

田中「早く、入ろう?」

3人は早速お店に入った。
一方・・・

池田「麻友、何でそんなに機嫌悪いの?」

彼女は西野の親友、池田 奈々《いけだ なな》。

西野「別にいい」

池田「南にフラれたとか?」

池田は、笑いながら言った。

西野「別に付き合つて、ないしー」

池田「じゃあ、南が花女に転校して来たとか？」

爆笑しながら池田は言ったが、西野はドキッ!とした。

西野「えっ、なっ、なわけないでしょう？」

西野は早歩きになり、その場から逃げた。

池田「ちよつとー、冗談よ、冗談」

先を歩いている西野に追いつくために急いで走った。
一方・・・

田中「れいなこれ試着してくるねー」

そういうと、ピンクのワンピースを片手に持って試着室のある方に走って行った。

前田「ね、このオレンジのひらひらしてるスカートとこの赤いスカートどっちが似合うと思う?」

鶴浜は、前田に相談され両方のスカートをはいた前田を想像する。

鶴浜（二つとも、お似合いだ。ヤバイ、かわいい）

鶴浜は前田の着替えを想像し今にも鼻血が出そうである。

鶴浜「ひとまず、試着してみて?それを見てから判断する」

前田「そうだね。来てみなきゃ分かんないよね」

前田「玲奈も着替えてるし、ウチらも行こう?」

前田と鶴浜は試着室に行った。

鶴浜は、我ながらいい答えだったと思った。

そのとき前田が驚きの発言をした。

前田「一回一回、着替えて外に出るの面倒くさいから試着室一緒に入って?」

鶴浜はドキッ!とした。

鶴浜(・・・一緒に試着室?ってことは・・・)」

鶴浜の心拍数が一気に上がり、下半身も興奮してきた。

前田「別に、女同士なんだしいでしょう?」

鶴浜(でも今断ったら、怪しまれるよな・・・。まあ、俺も女なんだし女子高生の生着替えを目の前で見てもいいよな・・・)

どうしても、前田の着替えが見たかった鶴浜は自分の感情に負けた。

鶴浜「わ、わかった」

前田「じゃあ、決まりね」

花女一可愛い前田の生着替えを妄想し鶴浜の手は手汗でビショビショ。

二人は、一番端の試着室に入りドアを閉めた。

鶴浜(尚子ちゃんの甘い匂いがヤバイ・・・)

前田がスカートのフックを外す。

「カチャ、カチャ・・・」

フックの金属がすれ度に鶴浜の下半身は大きくなる。

「スルッ！！」前田のスカートが下に落ちた。

鶴浜（＼シャツの下から、薄ピンクのパンティーが見えてる・・・）

鶴浜の下半身は最大限まで固くなり大きくなった。

薄ピンクのパンティーは足の付け根にひらひらがついていて、中央はややモッコリしている。

鶴浜は、自分の下半身を触りたいが我慢している。
そのとき！

田中「二人で入って、なあにレズってんの？」

田中は苦笑いしながら言ったが、鶴浜には聞こえてなかった。
鶴浜の頭の中には前田しかない。

鶴浜（こんな可愛い子のパンティー間近で見ちゃった）

そんなこと考えてる鶴浜の耳に誰の言葉も入ってこなかった。

3人は買い物を済ませ、店から出てきた。

田中「南は何も買わなくてよかったの？」

鶴浜は自分の買い物のことをすっかり忘れていた。

鶴浜「うん、いいよ」

鶴浜（それより、いい体験できたから・・・）

3人は店を後にし、下校道の路地にいた。
前から3人組のヤクザらしき男たちが前から歩いてきた。

ヤクザ1「あれー、君たちって花女の生徒じゃない？」

ヤクザの一人が3人に声をかけて来た。
すぐさま3人は囲まれ身動きが取れなくなった。

ヤクザ2「今から、ホテル行こうよ」

ヤクザ3「お金は俺らが出すからさ」

ヤクザ1「断ったら、どうなるか分かるよなあ」

田中「嫌です。行きません」

ヤクザ2が返答した田中の肩に右手を回し、左手で胸を触った。

ヤクザ2「お嬢ちゃん、いい胸もってるじゃん」

確かに田中の胸はEカップ以上あり、女子高生にしては巨乳である。

田中「やめてください。警察呼びますよ」

ヤクザ2「呼べるもんなら読んでみな」

苦笑いしながら田中の胸を揉む。

(モミ、モミ、モミ・・・)

すると、ヤクザ1、3は鶴浜と前田の手を縄で縛りお互いに背中をつけて座らせ、ガムテープで口をふさいだ。

ヤクザ2「お嬢ちゃん気持ちいい？」

ヤクザ1は田中のスカートをめくり上げた。

ヤクザ3はしゃがみ込みパンツの上から中指でいじる。

(クニ、クニ、クニツ・・・)

思わず田中の口から声がでる。

田中「あん、あん、あんっ！」

鶴浜はガマン出来なくなった。

鶴浜は腕力で縄を引きちぎり、ガムテープを外して、近くにあった一斗缶をヤクザ目掛けて蹴り飛ばした。

「バーン!!」

鶴浜の蹴った一斗缶は、田中の顔のスレスレを通り、ヤクザ2の顔面にヒット!!

ヤクザ1、2は思わず田中を放した。田中は、目の前でしゃがみ込んでいるヤクザ3の顔を蹴り上げ、鶴浜たちのもとへ走って逃げた。

ヤクザ1「テメー、何しやがる」

ヤクザ1が鶴浜に殴りかかったが鶴浜はサッとよけ、すかさずヤク

ザ１の腹に蹴りを入れた…

田中「尚子、今ほどくから」

そう言つて、前田の縄をほどいた。

ヤクザ１は腹を抱えうずくまっている。

一斗缶が当たったヤクザ２と蹴り上げられたヤクザ３はのびている・
・

鶴浜「今だ、逃げるぞ」

鶴浜は前田と田中の手をしっかりと握り締めその場を立ち去った。

つづく

#3 花女のチアリーダー (前書き)

花女体育祭まで後一週間。

しかし、花女の体育祭は他の高校と一味違う。

しかも、男の鶴浜がチアリーダーに!?

多少いやらしい表現がありますが、ご了承ください

#3 花女のチアリーダー

三人は、全力で各自の家に帰ることにした・・・

次の日・・・

学級委員長の高峯^{たかみね} 遥香^{はるか}が大量に資料を抱え、教室に入ってきた。

「ドンッ!!」

資料を教卓の上に置き、チョークを手を取った。

高峯「はい、静かにしてください!」

高峯の一言で教室が静まりかえった。

高峯は黒板の方を向き、文字を書き始めた。

「カキ、カキ、カキ・・・」

その文字とは・・・

「花女体育祭!!」

田中「もう、そんな時期か」

高峯「花体まで、後一週間」

高峯「つと、言うことで今から、チアリーダーを決めます」

高峯の言葉に疑問を抱いた鶴浜は前田に聞いた。

鶴浜「応援リーダーじゃないの？」

前田「花女は応援リーダーじゃなくてチアリーダー。カッコよさではなく可愛さやセクシーさを競うの」

前田「チアで競うのは、全部で3部門」

前田「一つ目は、可愛さ部門。これは、化粧して自分をどれだけ可愛くアピールできるかを競う」

前田「二つ目は、きれいさ部門。これは、足を上げる角度やジャンプの高さなど、チアの基本的な技術を競う」

前田「最後はセクシーさ部門。これは衣装の、露出度で決まる。でも、裸などの行き過ぎた露出は引かれるから減点なの。見えそうでなかなか見えない方が男はドキドキするからね」

前田「ちなみに、去年はウチらがチアの団体部門オール制覇したんだよ」

鶴浜「ってことは、選出も決めてだね」

前田「うん。・・・でも、最大の強敵は、A組の西野 麻友ちゃん」

鶴浜「麻友が？」

幼なじみの西野がそんなに人気があるとは思えなかった。

前田「麻友ちゃんは、去年の花体の個人部門で圧倒的な票数で1位になったの」

鶴浜「票数？」

前田「花女は女子校だからかなりの男子が見に来るの。だから、前売り券を持ってないと運動場のスタンドで見れないんだ。つで、その前売り券と一緒に投票券がついてくるってわけ」

前田「まあー、これで誰が花女で一番ファンが多いかが分かるってことかな」

鶴浜「前売り券っていくら？」

前田「一枚1500円位じゃないかな？買ったことないからわからない」

鶴浜（そりゃそうだ、だって自分たちの体育祭なんだからな。それにしても、入場料を1500円も取るってすごいな）

鶴浜は前田の話を聞きながら思った。

鶴浜「もし、前売り券が買えなかったら？」

前田「フェンスの外から見たり、テレビで見たりしてるみたいだよ」

前田「体育祭の前日から体育祭の後にある握手ふれあい会が終わるまで学校付近の道路は全面通行止めになるし、テレビでは最初から最後まで生放送されてるんだよ」

鶴浜「握手ふれあい会？」

前田「体育祭を見に来てくれたお礼に一人の生徒と握手できるサービスだよ」

鶴浜「アイドルかよ・・・」

前田「まー、この辺ではちょっとしたアイドルかな」

前田と鶴浜は苦笑いした。

高峯「今年も20人まで参加できます。チアになりたい人は手を挙げてください」

高峯がそいうとかなりの手が挙がった。
高峯は急いで数える。

高峯「今、19人ですが他にはいませんか？」

隣の席の田中が鶴浜の手首を握り挙げた。

田中「南が、します！」

前田「はい、決まり」

強制的に決まった・・・

高峯「では、この20人でいきます」

高峯「チアの皆さんは今日の放課後、第4体育館に集まってください」

この花女には4つの体育館があり、すべて2階建て。つまり、第8体育館まであることになる。
しかも、エアコン付きだ。

授業が終わり、鶴浜は田中、前田と一緒に体育館に行くことにした。
そのとき・・・

田中「ねー、トイレ」

田中がトイレに行きたいといいだした。

前田「行こっか」

女子トイレに行くってことは・・・

鶴浜（じよ、女子トイレ）

鶴浜の下半身が一気に固くなり大きくなる。

今まで、誰もいない女子トイレには入ったことあるけど女子と一緒に
に入る上に女子のオ。ツコをしてる音まで聞こえる。まさに、鶴浜
にとって天国である。

鶴浜「行くなら、早く行こっか？」

妙に張り切っている鶴浜に田中が聞いた。

田中「なんで、トイレ行くだけなのに張り切ってるの？」

鶴浜は少しでも早く女子トイレに入りたかった・・・

つづく。

#4 前田尚子が転落！?? (前書き)

2年B組のチアの練習がはじまった。

鶴浜にとってチアの練習は興奮だらけ…。

しかし、最後の3段タワーで悲劇が…。

多いやらしい表現がありますが、ご了承ください。

#4 前田尚子が転落！？

トイレを済ませた3人は急いで体育館を目指した。

田中「ねえ、尚子。今年は西野さんに勝ってね。花女総選挙では勝てたけど、チア個人では、負けしさ」

前田「勝ちたいんだけど、やっぱり西野さんの露出度ハンパないし、スタイル良いし、胸デカイし。かなりの強敵だよ」

そんな話をしているうちに第4体育館に着いた。

高峯「玲々奈たちー早く始めるよお」

クラス委員長の高峯遥香が3人を呼ぶ。

玲奈たち3人以外は全員既に集まっていた。

3人が急いで皆のもとに駆け寄ると。高峯が掛け声をかけた。

高峯「えんじゅん！！」

全員「はいっ」

高峯の掛け声に合わせて全員が返事をする。

皆が円になり片手を出して重ね合わせた。

高峯「今日からチアの練習頑張っていきましょう」

高峯「心をひとつに…、せーの」

全員「L e t ' s N o . 1」

そう言うのと合わせていた手を高々に挙げた。

南もわからなかったが一先ず皆に合わせた。

鶴浜「ねえ、今のなに？」

田中「今のは、ウチら2年B組の円陣よ」

前田「円陣はクラスによって掛け声が違うの、私たちの掛け声は、遥香が「円陣」って掛け声をかけたら、皆が「はい」って答えて円を作って右手を重ね合わせるの。重ね合わせたら、遥香が「心をひとつに…、せーの」って言うから皆で、「L e t ' s N o . 1」って言って手を挙げるんだよ」

鶴浜はまだよく分かってなかった。

高峯「じゃあ、尚子はY字バランスの練習、玲奈と南はバク転の練習、……………」

つと、皆の練習メニューを遥香が指示する。

南のとなりで尚子でY字バランスの練習を始めた。

南は期待して尚子のスカート中に目をやった。

すると……………。

鶴浜（キターーーッ！！）

南が期待してたものそれは…。

鶴浜（尚子のマ コにパンティー食い込んでる！！）

南の下半身は絶好調。カチンコチンになった……………。

田中「ねえ、南ってバク転出来るの？」

何も知らない玲奈は南に聞いた。しかし、今の南の下半身はバク転どころじゃないくらいに大きく固くなっていた。

鶴浜「玲奈のバク転見てみたい」

田中「いいよ」

そう言うといきなり、ロンドートからバク転。最後にバク宙までやった…。

鶴浜「スゲー!!」

南は玲奈のバク転バク宙に開いた口が塞がらなかった。

そのとき…。

高峯「じゃあ、最後のキメするよー」

鶴浜「最後のキメ？」

南に質問された玲奈は小さな声で答えた。

田中「最後の決めポーズ。チア審査で一番点数が高い所なの、ウチらは去年と同じで3段タワーを作って、頂点で尚子がY字バランスをするの」

鶴浜「3段タワーの頂点で？」

南は本日2回目の開いた口が塞がらない状態になった。

高峯「ぢゃあ、去年と同じポジションねー。あ、南は転校した恵令奈のポジションに入って？」

いきなり、遥香に名前を呼ばれた南は、指示されるがままにポジションに着いた。

南は一番土台となる一番下の14人の所に入ったが、後にそれが、とんでもないことになってしまう。

南たち14人は肩を組しゃがみ込んだ。

そしてその上に玲奈たち5人がのりしゃがんだ。

最後に尚子が5人の上にしゃがんだのを見て、2段目の遥香が声をかけた。

高峯「せーの！！」

掛け声とともに、一番下だけが立ち上がった。

高峯「せーの!!」

高峯が2回目の声をかけ、2段目も立ち上がる。

高峯「せーの!!」

尚子が立ち上がり最後にY字をすれば成功だった、そのとき……。

前田「あ~~~~~!!」

つづく。

#5 玲奈に男だとバレる!?? (前書き)

前田 尚子が救急車で運ばれた後、玲奈と南は一緒に下校すること
に。

下校中に南の親友とバッタリ。

鶴浜 南の運命は・・・。

多少いやらしい表現がありますがご了承ください。

#5 玲奈に男だとバレる!??

ピーポー、ピーポー。

尚子は、うずくまりながら救急車の乗せられた。

高峯「私が付き添います。今日の練習は終わるので、気をつけて帰ってください」

そついうと、遥香も救急車に乗り込んだ・・・。

そのころ、2年A組の西野^{にしの}麻友^{まゆ}と池田^{いけだ}奈奈^{なな}は、同じクラスの石^{いし}川^{かわ}沙紀^{さき}、椎名^{しいな}希美^{のぞみ}、亀井^{かめい}美貴^{みき}の5人で買い物に来ていた。

深名「こないだ買ったこのルビーのネックレス、もう、飽きたんだよね」

西野「そついえば、そつね」

椎名 希美・・・、椎名財閥のお嬢様。

そして、西野 麻友・・・、両親が医者であり、祖父が元総理大臣で現国会議員と、今までお金に関して困ったことが一度もないとい

う。こちらも、ものすごいお嬢様である。

石川「ねー、ネックレスいらなくなったら沙紀にちょうだいよ」

亀井「わたしもー」

椎名「別にいいよ」

そういうと、希美は首に付けているルビーのネックレスをはずし、沙紀に手渡した。

椎名「美貴には、家にあるのを今度あげるね」

亀井「うんっ！」

先を歩いている奈々と麻友が3人に声をかけた。

池田「おーい、早くいくよー」

3人「ごめーん、待ってー」

遅れをとっている3人が走って2人の元に向かった・・・。

田中「南、一緒に帰ろー」

鶴浜「うんっ！」

2人は校門を出て歩道を歩いていた。

そのとき……。

2人組の男子生徒が前から歩いてきた。

それに気づいた鶴浜が急に立ち止まった。

田中「南、どうしたの？」

鶴浜「えっ！いいや、なんでも……ない」

2人の男子生徒が南に気づいた。

なんと、その男子生徒は府蘭須学院のときの南の親友、櫻井さくらい 颯斗はやとと村上むらかみ 孝たかしだった。

櫻井「なあ村上、あれってもしかして鶴浜じゃないよな？」

村上「もしかしての鶴浜だと思う」

・・・。

南の目の前に櫻井と村上が立ち止まった。

4人は沈黙していた・・・。

櫻井が口を開いた。

櫻井「あのー、鶴浜君はなぜ女装してらっしゃるんですか？」

櫻井は敢えてよそよそしく聞いた。

櫻井の言葉に玲奈が動揺した。

田中「じよ、じよ、女装ー？」

玲奈は驚きを隠せない・・・。

村上「鶴浜が転校した事は知っていたが、まさかの女子高で、中でもよりによって花女に転校してたなんて・・・。」

村上「てか、よく入学許可とれたなあ」

南はうつ向いていた。

田中「南、本当なの？」

うつ向いている南の顔を覗き込みながら聞く。

すると、いきなり玲奈の両肩を握りしめ顔を挙げた。

鶴浜「頼む玲奈、俺が男である事は誰にも言わないでくれ・・・」

真剣な顔でいきなり頼まれた玲奈は、あまりの急な出来事で返事をする事ができなかった・・・。

つづく

#6 南が転校してきた理由（前書き）

前田は田中をひと気のない所に連れ出して、最近鶴浜と距離を置いている理由を聞く。

田中は、鶴浜に「誰にも言うな」と言われていたが、前田に鶴浜が男であることを伝えてしまった・・・。

多少いやらしい表現がありますがご了承ください。

#6 南が転校してきた理由

それから数日後・・・。

高峯「明日の運動会の準備があるのでテキパキ行動してください」

高峯が説明しているのを、外を眺めながら上の空で聞いていた。

田中（南が・・・男）

あの事件から鶴浜と田中の距離が遠くなっていた。

高峯「それでは準備をしたいと思います」

そういうと、みんな各自の準備に向かった。

前田が近づいて来た。

前田「玲々奈。どうしたのっ!」

田中「あっ、尚子。腰はもう大丈夫なの?」

前田「うんっ！ 軽い打撲だけだったし」

田中「そっか・・・」

やる気のない田中の返事に不思議に思った前田は田中の手を取り、引っ張った。

前田「玲奈、ちょっと」

そう言っつて、ひと気のない所に田中を連れ出した。

そして、田中を壁に押し付けて少し強めに言った。

前田「ねえー、明日運動会なの。やる気ないなら明日学校に来ないで！ー」

田中が言い返す。

田中「尚子には関係ないでしょっ！ー」

前田「関係ある。どうせ、南かなんかの事でしょ」

田中「えっ」

いきなり、ピンポイントで言い当てられた田中は言い返す言葉が見
つからなかった。

田中「どうして・・・」

前田「やっぱりね、最近南を避けてるようだったから」

前田「何かあったの？」

田中「実は・・・、南の事なんだけど」

前田「南がどうかした？」

田中がツバを飲んだ。

（ゴクッ）

そして、改め話し始めた。

田中「驚かずにきいてね」

前田「う、うんっ」

田中「誰にも、言わないでね。・・・南って実は、男だったの」

田中は前田が驚くと思い、期待して前田の顔を覗いた。

しかし、前田は驚くと言つよりあきれた顔をしている。

不思議に思つた田中は前田に聞いた。

田中「驚かないの？」

すると・・・、

前田「逆に、知らなかったの？」

この返答に田中がビックリした。

田中「知つてたの？」

田中は目を丸くした。

前田「うんっ」

田中「なんで？」

前田は、何も知らない田中にあきれた顔で簡単に教える事にした。

前田「まあ、簡単に言つと南は尚子の元カレ」

田中「元カレえゝっ？」

前田「うん。てか、違和感なかった？尚子が来たばかりの転校生をいきなり「南」って呼び捨てしたとき、普通なら「鶴浜さん」って言うくない？」

田中「確かに」

前田「尚子も南が転校して来たときはさすがに驚いた。しかも、別れたばかりだったから」

前田「けど、よくよく考えてみたら転校して来た本当の理由と、別れた話を持ち掛けてきた本当の理由が分かったから今は普通」

田中「転校して来た本当の理由？」

前田「何言ってるのか未だに分からなかった田中は、ひたすら質問するしかなかった。」

前田「うん。本当の理由」

前田「聞きたい？」

田中「うんっ」

前田はしょうがなく教えてあげる事にした。

前田「2年A組の西野 麻友ちゃんが、元110mハードルの選手だったんだけど、足をケガをしたのを理由に今は、陸上やってないのは知ってるでしょう？」

田中「うん、でも南の転校と西野さんがどういう関係があるの？」

前田「南と西野さんは幼馴染みの」

田中「ってことは、またハードルさせるために女装までして、花女に来たわけ？」

前田「そう、そして花女に来るために尚子と別れようって言いだしたの。花女に彼氏が来たとかになったらすぐに男ってバレるから」

田中「なるほどね」

前田「まあ、明日運動会だし、この話しは忘れて明日に備えよう？」

田中「うんっ！」

田中は、いつもの明るさを取り戻した・・・。

うん。

#7 お祝いパーティー！？ （前書き）

花女の体育祭も無事終わった。

鶴浜、前田、田中の3人は鶴浜の家でお祝いパーティーをすることに・・・。

多いやらしい表現がありますがご了承ください。

#7 お祝いパーティー！？

体育祭も無事終わった・・・。

鶴浜「尚子、おめでとう」

今年の花女子ア個人部門で見事、1位になったのは2年B組の前田尚子だった。

個人部門だけは、観客の総選挙で順位が決まる。

前田「ありがとう」

素直に喜ぶ前田と一緒にいる田中に鶴浜が言った。

鶴浜「せっかくだからウチでお祝いしない？3人で」

いつもなら、「うん」と言う田中が返事をしない。

田中はこのときから鶴浜の事を意識し始めていたのだ。

前田「尚子は賛成！玲奈が来ないなら今夜は2人つきりだねー」

つと、わざとらしく田中に向かって言った。

田中「分かったわよ。私も行く」

鶴浜「よし、決まりだね。今日はせっかくだから2人とも可愛い服装でくること。いいね」

前田「南、下心バレバレー」

3人「あははは・・・」

久しぶりに大声で笑った3人だった・・・。

>PM19:00<

「ピン、ポーン」

鶴浜「はい」

鶴浜が走って玄関を開けると、胸開きミニスカの美少女が2人立っていた。

鶴浜「どうぞ」

田中「お邪魔します」

前田「お邪魔します」

鶴浜は2人を自室に案内した。

するといきなり、前田が見つけてしまった。

前田「ねえー、南何これー!？」

そう言つて、女性の裸の雑誌を鶴浜に見せつけた。

鶴浜「あっ!!!余計なものを見つけてないの!!!」

そう言つて、急いで取り上げベッドの下に投げ入れた。

田中「へえー、南って胸大きい娘がタイプなんだあ」

田中が上着を脱いで谷間を見せつけた。

そして、前田も上着を脱いだ。

前田「よかったねー、今日はおっきいおっぱいの美少女しかいないよあー」

鶴浜の股間がドンドン固く大きくなっていく。

前田と田中が鶴浜をベッドに押し倒した。

「ドスン！」

田中「今日は私たちと遊ぼう？」

前田「南とこんなことするの久しぶりだね」

前田「今日は、一緒に気持ちよくなろうね」

そう言つて、3人は布団の中に潜りこんだ・・・。

う
う
う
う
う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5593w/>

ドリームライフ

2011年12月17日12時57分発行